

30-31 節. 「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」

この両節はヨハネによる福音書の正式な結語である。21 章 24, 25 節にも結語があるが、21 章そのものは後に付け加えられたものである。

主イエスが弟子たちの前でなさった「多くのしるし」は、通常、奇跡のことであるが、ヨハネによる福音書では、主イエスによる奇跡と説話、両方をさしている (12:37 参照)。(【TEV】miracles、【NKJV】signs)

主イエスがなさった病気を癒しや死者の復活などの「しるし」は、主イエスが神から遣わされた方であることを指し示す「しるし」(signs)である (3:2、14:11 参照)

因みに、ヨハネによる福音書では 7 つの奇跡のみ記されていて (2:1 以下、4:43 以下、5:1 以下、6:1 以下、6:16 以下、9:1 以下、11:38 以下)、しかもそれらの奇跡の後に主イエスの長い説話が続く。

「しるし」(σημείον、セーメイオン)を、狭い意味での「奇跡」と理解するとき、ヨハネによる福音書は例えばマルコによる福音書と比較すると、記されている奇跡の数はかなり少ない。

31 節はヨハネによる福音書を書いた目的が記されている。その目的は、イエスが「神の子メシアである」(ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ、ホキストス ホヒュオス トユ セー)ことを信じ、主イエスの名によって「命」(ζωή、ゾーエー、通常「永遠の命」。3:1 以下の主イエスとニコデモとの対話参照、17:3「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」)。

ヨハネによる福音書は、初めからこの目的に沿う形で主イエスが神から遣わされた方であることを主張してきたし、主イエス御自身も繰り返そう宣言している。

ここで重要なことは、ただ「メシア」(原文では「キリスト」)ではないという点。イスラエルでは「メシア」は、「油注がれた者」という意味 (1:41)で、王、祭司、預言者がそう呼ばれた。主イエスはそのようなメシアでとは違い、「神の子」メシアである (1:34、49、5:25、10:36、11:4、27 参照)。

主イエスはユダヤ人たちから、自分を神の子とする者として、つまり神冒瀆罪で訴えられ (19:7)、十字架上で処刑されたのである。そのイエスを「神の子メシア」と告白し信じることは当時のユダヤ教生活共同体では生きて行くことができないことであった (9:22 参照)。そのような状況の下、そのイエスこそ「神の子メシア」である

ことを伝えるためにこの福音書が書かれたと記している。それは、イエスを神の子メシアと信じることが「永遠の命」を受ける道（14:6）だからである。「イエスの名」（原文では「彼の名」）とは、主イエスが、神の子キリストであるという、主イエスの本質を表す。名は本質を表す。主イエスを「神の子キリスト」と信じ生き始めるとき、人は「永遠の命（ゾーエー）」を生き始める（3:1 以下参照）

## 21 章

1 節. 「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。」

「その後」とは、続く 14 節の「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」という言葉からして、20 章 29 節から続くこということになる。しかし、この 21 章は後に付加されたものであることに学者たちの間に異論はない。

「ティベリアス湖」。ガリラヤ湖をこのような呼び名で記すのはヨハネによる福音書のみ（6:1）。この呼び名は、ヘロデ大王の息子であるヘロデ・アンティパスがガリラヤ地方の領主となったときに当時の皇帝（ティベリウス、ローマ帝国 2 代目の皇帝、在位：14 年～37 年、即ち主イエスが公生涯の時の皇帝）の名をもつ都市を造営した（聖書の付録「聖書地図 6 参照」ことに由来する）。

「ヨハネによる福音書では、ガリラヤ湖と記さず、「ティベリアス湖」と記しているのは、地理的にガリラヤ湖のことを指しているのではなく、この皇帝の名に代表されるローマ帝国を指しているからだ」（及川）

及川牧師の言葉を受け入れると、3 節以下の「漁をする」弟子たちの姿は、ローマ帝国内で「伝道する」姿である。

2 節. 「シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。」

挙げられている弟子の数は完全数を意味する 7 名。「ゼベダイの子たち」とは、マルコによる福音書 1 章 19 節によると「ヤコブとヨハネ」である。このリストには「愛弟子」が出てこない。恐らく、「ほかの二人の弟子」（1:35 以下参照、一人はペトロの兄弟アンデレ《1:40》）の一人がそうであると思われる（7 節）。ということは、ヨハネによる福音書だけに出てくる「愛弟子」は、12 弟子の一人ではない、別のヨハネであるということになる。

3 節. 「シモン・ペトロが、『わたしは漁に行く』と言うと、彼らは、『わたしたちも一緒に行こう』と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」

20章21節では、復活の主イエスが弟子たちを遣わしている。ここでの「漁に行く」というのは、及川牧師の言葉のように「伝道」と理解した方が良いであろう。彼らは主イエスが言われた「人間をとる漁師」（マルコ1:17）として伝道に励んだが収穫はなかった（ルカ5:5参照）。

4節。「既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。」

復活の主イエスがマグダラのマリア他女性の弟子たちに現れたのは夜明け頃であった。夜の闇が朝の光に追われて退くように、真の光である主イエス(1:4、8:12)は、夜通し働いても成果がなかった弟子たちのところに現れる。

復活された主イエスが現れるとき、それがイエスだと分からなかったのは、マグダラのマリア(19:11以下)やエマオに向かう弟子たち(ルカ24:13以下)も同様であった。それが復活の主イエスだと分かるのは、主イエスの方からの何らかの働き（マリアよ！と名を呼ぶとか、パンを裂くなど）があるときのみ。

5節。「イエスが、『子たちよ、何か食べる物があるか』と言われると、彼らは、『ありません』と答えた。」

「子たち」(παῖδιον、パイディオン、幼子)。「食べ物」と訳されている言葉(προσφάγιον、プロスパギオン)は、パンに添えて食べる副菜、魚を意味する言葉。主イエスは岸辺に立っていて、弟子たちの船はまだ岸にはついていない。声が届く距離の湖上にいる。

6節。「イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」

ルカ5章1節以下参照。そこでは、「沖に漕ぎ出して網を下ろし、漁をなさい」という主イエスの言葉に、ペトロが「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を下ろしてみましよう」と、主イエスの言葉に聴従する姿が描かれている。

7節。「イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、『主だ』と言った。シモン・ペトロは『主だ』と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。」

「イエスの愛しておられたあの弟子」、つまり愛弟子は、これまで確認してきたように、殆どの場合ペトロと組み合わせで出てくる。そして、この弟子の方がペトロよりも主イエスの証人としてはより優れているという主張する場合が多い。ここでも復活の主イエスに先に気づいたのはこの弟子である。

「主だ」(κύριος、キュリオス)。信仰告白の言葉(20:28)。ペトロが湖に飛び込んだのは、大漁ゆえに重くなった船で行くよりも泳ぐ方が早いからと判断したからであろうし、その行動に、主イエスへのペトロの思い、信仰が表れていると言えよう。

8節。「ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。」

「二百ペキス」は、約90メートル。一ペキスは、一アンマと同じで約45センチ。

(聖書付録、「度量衡および通貨」参照)

9節。「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」

【新改訳改訂第3版】「こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。」

【TEV】 When they stepped ashore, they saw a charcoal fire there with fish on it and some bread.

【NKJV】 Then, as soon as they had come to land, they saw a fire of coals there, and fish laid on it, and bread.

弟子たちは、見る(現在形)、炭火が起こされていて、その上に魚が置いてあり、パンがあるのを。不思議な光景である。主イエスは弟子たちがとった魚を持って来る前に、既に彼らに提供する食事の用意を整えて待っていたのである。

「9節は12節の聖餐の場面を導入している。」(伊吹)

10—11節。「イエスが、『今とった魚を何匹か持って来なさい』と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。」

「イエスは弟子たちが取った魚も加える。これによって聖餐と豊漁は結びつく。11節で大漁の話は終わる。6,8節の続きである。この間に愛弟子とペトロ(7節)及び聖餐のモチーフが入っている。ペトロが網を陸へ引き上げると153匹の大きな魚が入っていた。ペトロが一人で網を引き上げるのは、教会の長であるペトロを強調していると受け取れる。網が破けなかったのは教会の唯一性を表すのかも知れない。魚を数えたという場面はないがその数は正確に示されている。奇跡の大きさとその現実性を証しするためであろうか。しかしそれを超えて宣教の成果を表していると考えられるが、いずれにしてもそれは単なる人間のあげる効果ではない。これはまたイエスの復活後の物語にふさわしい。弟子の宣教の結果を指し示しているからである。153という数はアレゴリーとしては、それがすべての魚の種類と考えられていたという。他に数の組み合わせの説もある。確かではない。全人類を指すということか。いずれにしてもルカ5:10『人間をとる漁師となる』という言葉からもそれが宣教の成果を指すのではないかということが考え得る。」(伊吹)